



# 宮城分科会の概要

テーマ

## つながりを持った教育復興、 復興教育と地域創造

開催日 平成24年11月3日(土・祝)、4日(日)

会場 宮城教育大学(宮城県仙台市)

### 趣旨・概要

東日本大震災後、甚大な被害を被った教育現場や地域社会の復興に向け、学校・大学、NPO、企業、地域、行政などの主体が連携し、つながりをもち一体となって復興教育や地域創造の取組が行われている。こうした、被災地における事例を中心に、その成果や今後の課題など、全国共通の課題を研究協議し、復興教育や地域創造関係者のネットワークの構築を図った。

### 分科会内容

平成24年11月3日(土・祝)

#### (1) オープニングセレモニー

##### ① 歓迎行事「宮城教育大学佐藤雅子名誉教授のゼミ生を中心とした舞踊」

- ・ 佐藤雅子名誉教授は、30年以上前から民俗舞踊の授業に取り組み、現役学生、卒業生を中心に、その教え子の子どもたちも交えながら、様々な機会に舞踊発表を行ってきた。震災後は、被災地での活動にも積極的に取り組んでいる。
- ・ 今回のフォーラムでは、仙台市立鶴巻小学校2年生、宮城教育大学公開講座受講生、雅座(宮城教育大学の学生や卒業生による民俗舞踊グループ)が地域の中で受け継がれてきた民俗舞踊を披露した。





## ② 主催者挨拶

主催者である見上一幸氏（宮城教育大学学長）及び笠浩史氏（文部科学副大臣）からそれぞれ挨拶が行われた。



## (2) パネルディスカッション「地域復興と復興教育」

### ■コーディネーター

貝ノ瀬 滋 氏（三鷹市教育委員会教育委員長／全国コミュニティ・スクール連絡協議会会長）

（主な内容）

- 開かれた学校づくりの中で、宮城に生まれた防災主任や防災担当主幹教諭などがキーパーソンとなって、地域連携の要になっていくことに期待をしたい。



### ■パネリスト

阿部 芳吉 氏（宮城教育大学教育復興支援センター特任教授）

（主な内容）

- 宮城教育大学では、3.11以降、宮城県教育委員会や仙台市教育委員会等と連絡を取り合いながら大学生を活用したボランティア活動を行い、学生たちの育成に努めてきた。
- 平成24年3月に1年間のまとめとして、宮城教育大学、気仙沼市校長会・教育委員会、仙台市立の中野小学校、榴岡小学校、七郷中学校の特徴的な足跡を記録集として刊行した。
- 平成24年度は、次の2点を重点努力事項とした。①仙台市校長会と連携して震災後に開発された教材の収集とその研究。②宮城教育大学とボランティアに参加した全国の学生等とのネットワークの構築とその学生たちがこの事業の計画立案に参加できるような基盤づくり。



高橋 仁 氏（宮城県教育委員会教育長）

（主な内容）

- 地域と連携が強い学校は避難所運営や学校再開がスムーズだった。日頃からの地域との結びつきを意識し、地域防災に取り組んでいきたい。
- 今回の震災において、避難所となった学校現場では教職員が対応に苦慮する場面も多かったことから、宮城県教育委員会が今後講ずるべき対策の方針として「県立学校が避難所として利用されることに係る基本的な考え方」をまとめた。
- 平成24年度から全ての公立学校に防災主任を配置するとともに、地域の拠点となる学校には、防災担当主幹教諭を市町村単位で配置し、体制整備を図った。また、災害安全はもとより交通安全、生活安全（防犯を含む）の三領域を網羅した本県独自の新指針を「みやぎ学校安全基本指針」として策定した。



野澤 令照 氏（仙台市立寺岡小学校長／学校と地域の融合教育研究会副会長）

（主な内容）

- 仙台市小学校長会では、復興を担い、未来を拓く子どもたちを育てるために、新たな教育の創造に取り組んでいる。困難に立ち向かいたくましく生きぬく子どもたち、時代の変化を受けとめ新たな社会を構築する子どもたちを育成するために、復興を支援する多様な活動同士の連携を強化し、協働して推進する仕組みづくりが重要である。
- 学校と地域の融合教育研究会は、学校教育や子どもの育成活動への直接的支援や、被災地からの情報発信を通じた復興教育の普及・啓発、復興を目指すまちづくり・コミュニティづくりへの支援などを積極的に展開している。



鈴木 孝三 氏（気仙沼市立大島中学校長）

（主な内容）

- 震災直後、大島は完全に孤立し、大人の多くが島外から戻れなくなった。残された住民のみで局面に対処せざるを得なかったなか、中学生は気丈に振る舞い、よく働いた。
- 生徒たちの「全国からの応援や支援に感謝し、期待に応えたい」、「自分たちの取組で地域に笑顔と元気を届けたい」という願いをかたちにするために「チーム大島プロジェクト」を立ち上げ、ボランティア活動など、できることから始め、貢献している。
- 今できる貢献も大切だが「中学生のできる復興への最大の貢献は勉強」ととらえ、知識を蓄え、考える力を磨いてもらうべく、地域や各種団体と連携のもと、学習支援に力を入れている。





### (3) 基調講演「『震災復興』に学ぶ」

#### ■講演者

高橋 孝助 氏（一般社団法人創造的復興教育協会代表理事）

#### （主な内容）

- さまざまな機関や団体と連携して、子どもたちに学習の条件を創ってあげる。それが新しく地域を作ること、創造することの重要なベースとなる。未来を担う子どもたちを考えない復興などはありえない。
- 石巻市牡鹿地域では重度の障がいのある子どもたちが、日ごろから、高齢者も含めた地域一帯となって避難訓練を行っていたことが奏功し、障がいのある子どもたちの被害が県内の他地域に比べて極めて少なかった。日ごろからの学校と地域の連携が危機的状況の中で地域全体を守った。
- 少子高齢化が進み、教育環境や学力に格差のあった震災前の状態から、若者が定着し、障がいのある人、高齢者も一緒に暮らせる新しい地域社会を創造的に作る「創造的復興」に、今回の大震災で得た貴重な経験をいかしていこう。



### (4) 事例報告

#### ■事例報告その1：教育復興「教育現場の復興と復興人材の育成」

久能 和夫 氏（仙台市立榴岡小学校長）

#### （主な内容）

- 震災時、榴岡小学校では、校内に残っていた約550名の児童の安全確保のほか、仙台駅閉鎖等による帰宅困難者2,500人以上の受入と対応に追われ、都市型災害における避難所運営の在り方を問われる学校としてクローズアップされた。
- 学校の教職員と地域の連合町内会と一緒に総合防災に取り組むなど、学校支援地域支援本部と顔の見える関係にあったことが、避難所運営に成功した要因の1つ。
- 教員を目指している学生の皆さんには、教師の使命感とは何か、ということを考えてほしい。



佐藤 一弘 氏（仙台市立七郷中学校長）

#### （主な内容）

- 危機対応時に力となるのは、組織であり個々の教職員との関係性だと痛感した。教職員との絆は、徹底したパーソナルコミュニケーションで築かれる。
- 被災地校として、この震災を語り継ぐ使命がある。祈念植樹、復興祈念碑建立、記録集・巨大壁画制作、フォトメッセージ作成等の取組を通じ、子どもたちの「心の復興」を図り、今後の「命の使い方（使命）」の教育に力を入れている。



今野 孝一 氏(仙台市教育委員会学びの連携推進室主幹兼主任指導主事/前女川町立女川第四小学校長)

(主な内容)

- 復興教育は2つある。1つは被災した子どもたちの心のケアや学力の保障、あるいは防災教育の推進であり、もうひとつは、今回の被災経験や教訓を後世にいかにして伝えるか。
- 今回の震災では、校長として瞬時の判断が求められた。学生の皆さんにも将来教員になるときのために判断力を身につけていただきたい。そのためには情報が重要。



### ■事例報告その2：創造的教育復興「NPOにおける教育復興『ヤングアメリカンズ アウトリーチ』」

佐野 一郎 氏 (NPO 法人じぶん未来クラブ代表)

(主な内容)

- 「ヤングアメリカンズ アウトリーチ」(英語で体験するミュージカルワークショップを通して行う教育活動)に参加した学生から、「自分を認めてもらうことの誇らしさ、他者を認めることのすばらしさを教えてもらった」との感想をいただいた。
- 「ヤングアメリカンズ アウトリーチ」に関わらず、様々なプログラムが、NPOをはじめ様々な団体で被災地において実施されている。子どもたちが、こうしたプログラムを体験し、そこで学んだことを日常生活にどう生かしていけるかが創造的復興教育の鍵となる。その鍵を握っているのは先生方。



### ■事例報告その3：地域復興「行政や大学による地域復興の取組『学都仙台コンソーシアム復興大学』」

沢田 康次 氏 (東北工業大学長/学都仙台コンソーシアム復興大学事業代表)

(主な内容)

- 被災地の惨状はあまりにも圧倒的であり、大学が連携してもできる支援は限られている。しかし、大学が個々に行うよりも、大学間がネットワークを持って支援体制を組むことが出来れば、地域性・広域性を出すことの可能性が広がる。
- 文部科学省の「大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業」の一つとして出発した「復興大学」事業では、復興のリーダーとなる人材育成を目指す「復興人材育成教育コース」、被災地や被災企業等の復興支援に大学の専門性を生かした支援を実施する「地域復興支援ワンストップサービス」、宮城県内の児童、生徒の支援、教員のサポートを行う「教育復興支援」、ボランティア活動の支援とサポートを行う「災害ボランティアステーション」の4つの事業を行っていて、外部からの連携・連絡も増大している。





## (5) 学生ボランティア報告会

(主な内容)

- ボランティア活動を通じ、学生ボランティアが地域の強みを知ることができ、そのことにより、次の一歩進んだ支援活動のヒントを得ることが出来た。
- どのようなボランティアにおいても信頼関係を作ること大切であり、それを築くためにも継続することが重要である。参加する学生が少しでも長く活動できる環境づくり、組織作りに取り組んでいきたい。



## (6) ポスターセッション

### ■出展団体

No	団体名称	取組内容
1	一般社団法人創造的復興教育協会	復興教育にあたっている学校・団体の取組の紹介
2	宮城教育大学教育復興支援センター	教育復興支援ボランティア活動の紹介
3	都留文科大学災害ボランティアチームVS (バーサス)	都留文科大学学生ボランティアチームの活動紹介
4	山梨県都留市活性化コンソーシアム Re:Tsûru (リツール)	山梨県都留市の地域活性化を目的とした産学官民協働コンソーシアムの活動紹介
5	学都仙台コンソーシアム復興大学	学都仙台コンソーシアムによる復興大学事業の紹介
6	学校と地域の融合教育研究会	学校と家庭・地域の融合に関する活動の紹介
7	大塚製薬株式会社	防災備蓄用食品の紹介と試供品の提供
8	NPO法人アーティスト・イン・児童館	遊びと表現と創造とが一体となった活動の紹介
9	NPO法人プラス・アーツ	楽しみながら学ぶ防災教育の取組の紹介
10	いしのみきカフェ「」(かぎかっこ) / ほっとスペース石巻	活動紹介及び石巻のカフェ店舗とスカイプ接続しての中継報告
11	プロジェクト結	被災地のコミュニティの復興と子どもの学びと遊びの機会を支援する活動の紹介



平成24年11月4日(日)

## (7) 熟議

### ① 熟議の概要

(各班からだされた主な課題や意見)

- 震災復興のなかで、「つながり」であったり「絆」という言葉をよく聞かすが、多くの人は、大事だと思いつつも漠然と言っているだけで、具体的には何も考えていないのではないか。今一度熟考してみたい。
- 震災で地域が疲弊したと言われているが、実際には、震災前から過疎化が進んでいる地域も多い。地域復興のためには、地域コミュニティを向上させることが重要になってくる。
- ボランティアに参加する側にとっても、経済的援助であるとか、相手からもらう笑顔といったものがないと、意欲が継続しない。
- 被災地からの情報発信が不十分。震災で支援を必要としている場所の現状というのが、うまく伝わっていないのではないかと。また、実際に津波の被害を受けた沿岸部と街中でも意識の差というものがある。被災地の支援に関して課題は山積みで学生にできることは小さいが、被災地では今どういう支援が必要なのかをボランティアへの意欲をもっている人たちに伝えていく、そういう機会を増やしていくことこそ学生が一番できることではないか。
- 情報発信の取組の方法として、ツイッターやフェイスブックなどを利用して情報を発信することも大切だが、回覧板や地域情報誌など、高齢者などの情報弱者に対する配慮も必要。情報発信することで、人とのつながりを持つことが出来るのではないかと。



### ② 熟議講評

(主な内容)

- あきらめず、なまけず、しかし、余り無理をせず、継続的に考え、話し合い、行動し、チームを作り、ネットワークを増やしていただきたい。
- どんな大学の偉い先生だろうと、学生であろうと、地域のおじさんおばさんであろうと、この復興にあたるという意味では、まったく同等の資格として力を合わせてやっつけていこう。
- 熟議は、行うことが自体が目的ではなく、夢やビジョンを達成していくためのツール・手段として生かしていただきたい。



### ③ 今後の展開（ネットワークづくり）

- フォーラムのテーマとなっている「つながり」を継続していく為、学生を中心にFacebookにグループを立ち上げた。活動報告や情報の共有をはかっていくこと、また、職業、年齢等関係無しで、再びアツい「熟議」を繰り広げることなどを検討している。  
(<http://www.facebook.com/groups/287387571373337/>)
- このグループを広める為、フォーラム中、またフォーラム後にFacebook上で「友達」になった参加者の方々に「グループメンバーを追加」で巻き込んでいきたい。

## (8) 閉会イベント

### ① 宮城教育大学チアリーディングサークル（smilax）による演技

- 大会への参加、他の部活動の応援のほか、東北楽天ゴールデンイーグルスや仙台エィティナイナースのチア部とのコラボレーションパフォーマンス、福祉施設でのステージなど、精力的に活動を行っている。
- 平成24年3月に東京ドームで行われた野球日本代表と台湾代表の復興支援チャリティーマッチにも招聘され、演技を披露した。



### ② まとめの講話

中井 滋 氏（宮城教育大学理事（就職・連携担当）・副学長）

- フォーラムを通じ、震災からの復興に向けて、一人一人が、あるいは学校が、地域社会が何をすれば良いか、教師は何を考えれば良いかなどを考えるきっかけとなったり、また、具体的な活動内容であったり、一人一人の中に何かの大切な芽が出てきたように思う。また、改めて、地域社会のネットワークの大切さについても気づかされた。
- 若者を中心として、そこにさまざまな職種や年齢の地域住民が集い、そこでさまざまな行動を起こしていけば、今回の東日本大震災からの復興もより早いスピードで進むのではなだろうか。そして、素晴らしい地域社会ができるのではないだろうか。

